

天 地 人

作家太宰治の師匠でもある井

伏鱒二は、体が大きくなりすぎ、すみかから外に出られないサンショウウオをユーモラスに描いた「山椒魚」で文壇デビューした。両親が本県出身の今東光に

も同タイトルの作品が残る▼井伏、今の作品がいずれもオオサンショウウオをイメージしているように、一般的に大きな印象があるが、国内に生息する40種以上のサンショウウオは尾も入れてほとんどが最大20センチと小型で、大部分が貴重な日本の固有種という▼西野敦雄弘前大学教授、池田紘士同准教授（現在は東京大学教授）の下、森井椋太さん（現在は東京大学研究員）は3月まで、大学院生の安田晶南さん（現在は東京大学大学院生）と、環境省レッドリスト準絶滅危惧種のクロサンショウウオを研究。その内容が興味深い▼春先の産卵・繁殖期は南に下がるほど期間が長くなり、繁殖に有利になるよう卵のうを抱え込む頭胴長（頭から総排出口まで）が、雄だけ長くなったことを明らかにし、世界的に評価を受けている▼ひっそり暮らすサンショウウオに日常気付くことは少ないが、自然の豊かさを象徴する生き物という。開発で生息数が減っていると肌で感じるといふ森井さんは、行く末に危機感をつのらせている。数百万年かけ頭胴長を長くしてきたサンショウウオに対し、開発による環境破壊は一瞬ですみかを奪ってしまう。

この画像は、当該ページに限って”東奥日報社”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。